

河内源氏の文芸教育

長谷部 寿彦[†]

The liberal arts education of *kawachigenji*

Toshihiko Hasebe

1. はじめに

武士の暴力性を否定的にみるにしても、武士が日本中世の牽引者であったことは認めざるをえない。また、社会の維持、再生産に必要な教育は当該社会の諸問題の集約的表現という性格をもつため、武士の教育史研究は日本中世史研究に重要な意味をもつ。

しかし、教育史学会編『教育史研究の最前線』（日本図書センター、2007年）、『教育史研究の最前線Ⅱ 創立60周年記念』（六花出版、2018年）の日本古代・中世教育史の掲載量の少なさや、近年の教育史の概説書で、日本古代・中世教育の言及がほとんどないことなどからうかがえるように、日本古代・中世教育史の研究は不振である。

そのため、今世紀初頭の『新体系日本史16 教育社会史』[1]の大戸安弘氏による中世教育の叙述は、今なお日本中世教育史研究の通説的見解を示す。そこで、まず本書の叙述を確認してみたい。

大戸氏は、武士を「貴族・寺院の古代勢力に対抗して、あらたな時代を切り拓く勢力」と考えた上で、武士が「独自の学校を創設するのではなく、寺院に委ねる場合が多くみられた」ことから、「中世をとおして、武士は教育および文化という精神生活に関する部分において、独自性・自立性を明示することができなかつた」と評価した。武芸教育については「武士階級のよりどころであったことから、総体としての武士の教育・文化が、貴族的文化に規定されていたとしても、ここにはその独自性を発揮する余地が大きかつた」と評価する[2]。

しかし、独自の学校をもたなかつたのは公家も同じである。中世の大学寮は学校としては有名無実になっていたし[3]、これに代わる学校も創設されなかつた。

また、武士がそもそも平安貴族社会のなかから成立してきた存在であることを踏まえると、武士の教育が平安時代以来の「貴族的文化」に規定されるのは当然といえば当然である。今、必要なのは中世武士の教育における「貴族的文化」がもつ意味を明らかにすることである。

そこで本稿では、その準備作業の一つとして、「辺境で

謀叛人を討伐し、京で王権を擁護する武士の第一人者」、「当時の武士の役割を象徴する武士本流」[4]河内源氏の文芸教育の実態を明らかにしたい[5]。

2. 河内源氏の子どもの教育開始年齢

2.1 7歳の画期性

平安貴族社会の子どもにとって、7歳は乳幼児から童と称される段階へ移行する人生の画期であり、童のなかで童殿上を許可された男子は朝廷行事への参加も許された[6]。

7歳は教育の画期でもあった。貴族の男子は、7歳前後に読書始という儀礼を行って文芸教育が開始される[7]。教育心理学で、7歳前後は「多くの認知過程が大人となっていく」画期とされる[8]。平安貴族社会の子どもの人生や教育の画期が7歳前後に設定されていたことは、発達からみても合理的なものであった。

2.2 源頼家・実朝の7歳

河内源氏の教育の画期も7歳前後と考えられる。河内源氏歴代のなかで、幼児期からの教育過程を追うことができるのが源頼家の事例である。

文治4年（1188）7月10日、7歳の頼家は大蔵御所で「御甲直垂」を着用する鎧着初を行った（『吾妻鏡』同日条。以下『鏡』と略称）。

野口実氏は、本事例と『風姿花伝』の「この芸に於いて大かた七歳を以て初めとす」という記述とを合わせて、中世の職能人の子弟は7歳頃に家の芸を習い始めたとみる[9]。

頼家の通過儀礼は、その後の鎌倉殿の先例となったため、『鏡』には史料が豊富に残された[10]。しかし、後述するように『鏡』に源実朝の文芸教育についての記述はあるが頼家についての記述はない。頼家に適性がなかつたとしても奇妙であり、『鏡』の頼家像が関係する可能性がある。今後の課題としたい。

『鏡』をみていくと、元仁元年（1224）4月28日に7歳の九条頼経が文字の学習を開始する通過儀礼「御手習始」を行い（『鏡』同日条）、同年5月4日には北条政子の手助けの

[†]2022年度修了（人文学プログラム）、現所属：放送大学選科履修生

もと「御手習」を行ったとみえる（『鏡』同日条）。

なお、頼家・実朝が「御手習始」を行った記述はない。しかし、鎌倉幕府の儀礼として、「御手習始」という通過儀礼を挙行したかはともかく、頼家や実朝も頼経と同じく7歳前後から文字学習を開始したものと考えられる。

2.3 源義経の鞍馬入寺年齢をめぐって

『義経記』巻一の「牛若鞍馬入の事」に、源義経が「七歳と申す二月はじめに鞍馬へとてぞのぼられ」、「ひるは終日に師の御坊の御まへにて経を誦み、書まなび」、「夜の更ゆくに仏の御灯の消ゆるまではともに物を読み」、「学問にこゝろのみぞ盡しける」と、義経が7歳の時、鞍馬山に入寺して「学問」に励んだという記述がみえる。

しかし、『尊卑分脈』「第二、義家五男為義、嫡男義朝流」は、義経が「自十一歳住鞍馬寺一和尚東光房阿闍梨賢日弟子善琳房覚日坊自幼幼之時頻嗜武芸」と11歳のこととする。渡辺保氏は、『尊卑分脈』の記述をおおむね肯定する [11]。

『義経記』と『尊卑分脈』の信頼性からいうと、渡辺氏の判断は穏当である。しかし、『義経記』の義経の鞍馬入寺年齢が、中世武士の教育の画期が7歳前後にあった実態の反映であることは認めてもよいと考える。

このことと本章で言及した内容を合わせると、河内源氏の子どもの教育も7歳前後を画期に開始されたものと考えられることができる。

3. 河内源氏の文芸教育の内容

3.1 河内源氏の漢文教育

『大鏡』第二巻の、いわゆる藤原公任の三舟の才の逸話であげられる作文（漢詩、漢文）、管絃（音楽）、和歌の三つの文芸は平安貴族の主要な教養であった。

そのうち、まず河内源氏と漢文教育の問題を考える。漢詩作成に親しんだ河内源氏は確認できないが、『本朝統文粹』巻第六に「頼義朝臣、申伊予守重任状」という漢文の公文書が収録されることが注目される。これは治暦元年（1065）のものともみられるが [12]、源頼義が優れた漢文能力をもっていたことを示している。

清和源氏の祖経基は大宰少貳、満仲は摂津守 [13]、河内源氏の祖頼信は河内守、頼義は伊予守 [14]、義家は陸奥守 [15] と清和源氏や河内源氏の基礎を築いた武士たちは受領を極官とした。

武芸を職能とする河内源氏でも、受領の業務遂行のために漢文の能力があることに越したことはない。そのため、河内源氏が受領の業務遂行に必要な漢文教育を受ける機会があったものと考えるのが妥当である。

頼義の弟頼清は文官として活躍し、頼義よりも先に安芸守となり受領になった [16]。この頼清の事例も、河内源氏の漢文教育の存在をうかがわせるものである。

摂津源氏の祖源頼光の子頼国は、漢文学を研究する文章

道の学生である文章生から蔵人に進み、藤原道長の漢詩の会にも参加するなど漢文の才能に優れていた [17]。『尊卑分脈』「第二、満仲息男頼光、頼親、頼平、頼範等流」には、頼国の甥満家も文章生であったとみえる。

これらの事例からは、河内源氏にも漢籍や漢詩などの教育を受ける機会があったことをうかがうことができる。

『今昔物語集』巻二十五ノ九「源頼信朝臣、責平忠恒語」に、源頼信が「家ノ伝ヘニテ聞キ置キケル」、「此ノ海ニハ浅キ道、堤ノ如クニテ、広サ一丈計ニテ直ク渡リケリ。深サ馬ノ太腹ニナム立ツナル」という軍事情報をもとに平忠常に攻めかかり、忠常を降伏させたという逸話がみえる。

この逸話は、武士に家伝の軍事情報があったことや、その教育があったことを示すものである。

『後三年記』 [18] に大江匡房から「合戦の道をしらぬ」と指摘された源義家が、匡房に「あひて文をよ」むようになり、「兵、野に伏ときに、雁、つらをやぶる」という知識を身につけて清原武衡を破ったという逸話がみえる。義家が学習した文とは『孫子』などの漢籍の兵法書とみられる [19]。この逸話は、匡房の指摘がなければ河内源氏の棟梁であっても漢籍の兵法書を学んでいなかったことを示している。

河内源氏の漢籍学習の問題を考える場合、『鏡』元久元年（1204）正月12日条の「將軍家御読書〔孝経〕始、相模権守為御持読」、同建永元年（1206）正月12日条の「將軍家御読書始、相模権守仲業〔束帯〕、為御持読、時尅持參御注孝経於寝殿南面、將軍家〔御布衣〕出御」という、源実朝の『孝経』の読書始の記事が注目される。

また、『鏡』建暦元年（1211）7月4日条の「將軍家令合貞觀政要給」、同11月20日条の「將軍家貞觀政要談義、今日被終其篇、去七月四日被始之」という、実朝が数ヶ月にわたって『貞觀政要』の談義を行ったという記事も注目される。

貴族の男子は、7歳前後に漢籍を学び始める読書始という通過儀礼を行った。使用される典籍は、一般的に『孝経』が使用され、『千字文』・『蒙求』や [20]、『史記五帝本紀』・『尚書』・『孟子』・『論語』・『毛詩』なども使用された [21]。

なお、実朝の読書始は、正月という時期、記事が2回みられることから、通過儀礼ではなく年中行事としての儀礼と考えられる。

ちなみに、『孝経』は大学寮では必修の経書である（養老学令経周易尚書条）。また、『貞觀政要』は唐の2代皇帝太宗と臣下の議論を収録したもので、日本でも「帝王学の書」として天皇や貴族に親しまれた [22]。

鎌倉幕府の性格についての代表的学説として、「東国における独自権力であることに鎌倉幕府の本質を認める」東国国家論と「中世国家の軍事・警察機能を分掌する武家権門と位置づける」権門体制論がある [23]。上横手雅敬氏は、「東国国家論が統一的契機を無視して成立せず、権門

体制論が分裂的契機を捨象して成立しない」ことから「二者択一を行う」よりも両者の総合的把握を目指すべきであるという、今なお重要な指摘をした [24]。

『孝経』が儒教の基本的経書であることや、河内源氏の漢学教育のあり方を想起すると、実朝以前にも『孝経』を学習した河内源氏は存在した可能性が高い。

しかし、実朝が幕府の年中行事として貴族社会で重視された儒教の経書『孝経』の読書始をしたり、数ヶ月をかけて「帝王学の書」『貞観政要』の談義を行ったりすることは個人の嗜好を越えた重要な政治的意味をもってくる。

すなわち、実朝が個人的に親しむのならばともかく、わざわざ『孝経』読書始や数ヶ月にわたって『貞観政要』の談義を行うことは、実朝が武家権門の棟梁に過ぎないのならば不要な行為であり、鎌倉幕府のもつ二つの性格のうちの東国国家の主を意識した行為であるとみることができる。

3.2 河内源氏の和歌教育

和歌は平安貴族社会において必要不可欠な社交手段であった。実朝と和歌の関係は有名だが [25]、ここでは実朝以外の河内源氏歴代の和歌教育の問題を考えてみたい。『拾遺和歌集』に、源経基の歌として、

686 あはれとし君だに言はば恋ひわびて死なん命も惜し
からなくに

909 雲井なる人を遙に思ふには我が心さへ空にこそなれ
という歌がみえる。また、寛和2年(986)年、清原元輔が肥後守に任じられた時の饞別の宴会で、満仲が詠んだ歌として、

334 君はよし行末通し留まる身の松ほどこいゝあらむと
すらん

という歌もみえる。これらの事例からは、清和源氏の武士が和歌の教育を受けて、社交手段として活用していたことがうかがえる。河内源氏棟梁としては、『千載和歌集』に源義家が陸奥国に赴いた時に詠んだ歌として、

103 吹く風をなこそその関と思へども道もせにちる山ざく
らかな

という歌がみえる。『古今著聞集』巻第九「源義家衣川にて安倍貞任と連歌の事」に、義家が安倍貞任に「衣のたてはほころびにけり」と詠み、貞任がこれに歌を返したという逸話がみえる。この逸話が史実かはともかく、義家が和歌に通じた武士として認識されていたことがうかがえる。

『新古今和歌集』には源頼朝の歌が二首みられるが、そのなかに頼朝が慈円に、

1786 陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ
壺の石ぶみ

と返した歌があり、頼朝も和歌を社交手段として活用していたことがわかる。河内源氏歴代棟梁のうち、頼信・頼義・為義・義朝・頼家は勅撰歌人ではないが、以上の事例から才能の優劣の差異はともかく、河内源氏が和歌の教育を受けていたことは認めてもよいと考える。

3.3 河内源氏の音楽教育

最後に河内源氏と管絃に代表される音楽教育をめぐる問題について考えてみたい。管絃については、源義家の弟義光が笙の名手として知られる。一般的に知られるのは、『古今著聞集』巻第六「源義光笙の秘曲を豊原時秋に授くる事」の義光が、豊原時元の弟子であり、時元から伝授された笙の秘曲「太食調入調曲」を相模国足柄山で時元の子時秋に伝授したという逸話である。

同様の逸話はいくつかあるが、義光の師の名や義光が秘曲を伝授した人物の名などに異同がある [26]。なお、「鳳笙師伝相承」は、義光の師は時元の父時光で、義光と時元は兄弟弟子とされ、義光から豊原氏に秘曲を伝授したという内容はみられない [27]。義光の師については、不明瞭なところがあるが、義光が笙の名手であることと、豊原氏よりその教育を受けたことは認めてもよいと考える。

『延慶本平家物語』第三末や『覚一本平家物語』巻第七「経正都落」には、平経正が「青山」という「琵琶」を所持していた逸話がみえる。また、『延慶本平家物語』第五本には、平敦盛が「月影」と名付けられた「箏」を所持していた逸話がある。なお、『覚一本平家物語』巻第九「敦盛最期」では、敦盛の所持する楽器は「笛の上手」の「おほち忠盛」が「鳥羽院より給はられ」て、「経盛相伝」ののち、敦盛に譲られた「小枝」という笛になっている。

また、『鏡』文治2年(1186)4月8日条に、鶴岡八幡宮で静御前に「令施舞曲」しめた時、工藤祐経が「鼓」、畠山重忠が「銅拍子」を演奏したと見え、武士にとって楽器演奏が身近なものであったことがうかがえる。

これらのことを合わせて考えると、各人の才能の優劣はともかく、義光以外の河内源氏も一通りの音楽教育を受ける機会があったものとみることができる。

4. おわりに

はじめにで、中世武士の教育における「貴族的文化」の意味を明らかにすることの必要性を指摘したが、本稿の検討から浮かび上がるのは、河内源氏の文芸教育が「貴族的文化」そのものといえるようなものだったことである。

はじめにで言及した『新体系日本史16 教育社会史』の中世教育の叙述のなかで大戸安弘氏は、鎌倉幕府が政権の基盤を固めるために「京都の貴族的文化への接近がはかられ」と指摘したが、そうではなく鎌倉幕府は当初から「貴族的文化」の影響下にあったということが出来る。

撰家・皇族将軍や得宗家などの文芸教育の具体的様相の解明は今後の課題だが、河内源氏の文芸教育の延長線上にあることは確かである。鎌倉幕府が東国国家的性格をもち、朝廷を圧倒するようになりながらも、武家権門的性格を払拭できなかった要因の一つは、このようなところにあると考えられるが、その検討は今後の課題としたい。

謝辞

本稿は2022年12月に放送大学大学院に提出した修士論文「河内源氏の教育内容と教育空間」の一部を改稿したものである。ご指導、並びに口頭試問の労をお取りいただいた近藤成一教授、杉森哲也教授に御礼を申し上げます。

文献

- [1] 辻本雅史・沖田行司編『新体系日本史16 教育社会史』(山川出版社, 2002年)。
- [2] [1]前掲辻本・沖田編著所収, 大戸安弘「2章 中世社会における教育の多面性 2 文庫の形成と口伝」。
- [3] [1]前掲辻本・沖田編著所収, 鈴木理恵「1章 大陸文化の受容から日本文化の形成へ 5 文家の形成と教育」では, 平安後期になると官人養成機能が大学寮にかわって, 博士家が形成した擬制的血縁集団に委ねられるようになったことや, 大学寮の建物が安元3年(1177)の焼失以降, 再建されなかったことなどが指摘される。
- [4] 元木泰雄著『河内源氏』(中公新書, 2011年)「はじめに-新しい河内源氏像を求めて」。
- [5] 鎌倉時代の武士の教育史研究は, 盛んではないが一定の蓄積がある。主なものに, 高橋俊乗著『日本教育文化史(1)』(講談社学術文庫, 1978年, 初出1933年)「第11章 鎌倉時代武士の教育」, 竹内明「第2章 文武にはげむ武士の子ども」結城陸郎編『日本子どもの歴史2 乱世の子ども』(第一法規出版, 1977年)・同氏「弓矢の習とその展開」講座『日本教育史』編集委員会編『講座 日本教育史 第1巻 原始・古代/中世』(第一法規出版, 1984年), 田端泰子「中世の「家」と教育」同氏著『日本中世女性史論』(塙書房, 1994年, 初出1993年), 高橋秀樹「鎌倉御家人の後継者育成」鈴木理恵編『家と子どもの社会史』(吉川弘文館, 2022年)など。
- [6] 服藤早苗a「童殿上の成立と変容」・b「平安朝の父子対面儀と子どもの認知」同氏著『平安王朝の子どもたち』(吉川弘文館, 2004年, a初出1997年, b初出1998年)。
- [7] [5]前掲高橋氏著書「第8章 奈良平安時代具案的教育の内容(一)」や, 結城陸郎編書所収の結城陸郎「第一章 伝統文化を背負う貴族の子ども」, 加藤理著『「ちご」と「わらは」の生活史』(慶応通信, 1994年)「I部 子どもの発達と発達観 3章 七歳前後の生育儀礼と子どもの発達」などを参照。
- [8] 竹綱誠一郎「第8章 人間の発達について考える」鎌原雅彦・竹綱誠一郎著『やさしい教育心理学第3版』(有斐閣, 2012年)。
- [9] 野口実著『武家の棟梁の条件』(中公新書, 1994年)「一 棟梁の条件」。
- [10] 藤本頼人著『源頼家とその時代』(吉川弘文館, 2023年)「東国の「王」の後継者 後継者へのみちすじ」。
- [11] 渡辺保著『源義経』(吉川弘文館, 1966年)「一 黄瀬川宿の対面まで」。
- [12] 元木泰雄著『源頼義』(吉川弘文館, 2017年)「第十二 帰京後の頼義と晩年」。
- [13] 元木泰雄著『源満仲・頼光』(ミネルヴァ書房, 2004年)「源満仲・頼光略年譜」。
- [14] [13]前掲元木氏著書「略年譜」。
- [15] 安田元久著『源義家』(吉川弘文館, 1966年)「略年譜」。
- [16] [12]前掲元木氏著書「第七 文官頼清」。
- [17] [13]前掲元木氏著書「第六章 摂津源氏の動向」。
- [18] 『後三年記』が院政期に成立したことは, 野中哲照著『後三年記詳注』(汲古書院, 2015年)「解説」参照。
- [19] [18]前掲野中氏著書, 151頁注釈。
- [20] [7]前掲高橋氏著書。
- [21] [7]前掲結城氏論文。
- [22] 石見清裕「はじめに-歴史の中の『貞観政要』」呉兢著・石見清裕訳注『貞観政要 全訳注』(講談社学術文庫, 2021年)。
- [23] 高橋典幸「鎌倉幕府論」大津透他編『岩波講座 日本歴史 第6巻 中世1』(岩波書店, 2013年)。
- [24] 上横手雅敬「鎌倉・室町幕府と朝廷」同氏著『日本中世国家史論考』(塙書房, 1994年, 初出1987年)。
- [25] 坂井孝一著『源実朝』(講談社選書メチエ, 2014年), 五味文彦著『源実朝』(角川選書, 2015年)など。
- [26] 源義光と豊原氏の逸話の異同については, 加地宏江校注『源威集』(東洋文庫, 1996年)115頁に表としてまとめられている。
- [27] 三島暁子「将軍が笙を学ぶということ-南北朝・室町時代の足利将軍家と笙の権威化」同氏著『天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史』(思文閣出版, 2012年, 初出同年)。